

柳田国男氏 (ノンフィクション作家)

子どもの将来、日本人の未来がかかっている

子供の未来に焦点を当てて話したいと思います。今の子供たちが、ネット社会、核家族化、貧困の中でどういう状況におかれているのかを見るにつけ、子供の人格形成、人間形成をするにあたって、絵本の読み聞かせが、ゼロ歳からのブックスタートに始まり、小学生、中学生含めてきわめて重要だと思います。スマホの普及により、家族がレストランで食事をしながらそれぞれスマホを見ているというような、家族の崩壊と言っていいようなことが起こっていますが、子供の人格形成に大事なことはスキンシップと肉声と、そしてそういう中での言語力の発達です。絵本の読み聞かせをひたむきにやっている家庭の子供の素晴らしさは実例でたくさん見えています。一方で三分の一ぐらいの家庭において、ほとんど絵本も買わない、読み聞かせもしない、そういうなかで子供の人間形成が非常に歪んできている。そういうことを考えると、家庭で、幼稚園、保育園、



学校で、本をどれくらいのびのびと買えるかどうかは大変大きい。現在、子供の貧困が大きな問題になっています。自治体によっては3割から4割の子供が給食費などで公的援助を受けている。そのような状況の中で、絵本を買いましょうといっても難しい。せめて月に1000円でも絵本のために投資する家計のやりくりを考えたときに、そこに10%の消費税がかかれば、いかに負担感が増すものか。

いま、私は家読(うちどく)運動の旗振り役をやっています。ゼロ歳から絵本の読み聞かせをし、小学生になっても童話などを親も子も一緒に読んで、物語や喜怒哀楽を共有してゆく、そういう中から豊かな感受性や言語能力が育ってゆく、これが家読です。この家読をするにはどうしても家庭に本が必要です。その本が買いにくくなる、手を出しにくくなるということは、子供の人格形成を危うくする、そういう問題を秘めている。

税制を考えることは日本人の未来、日本という国の未来、それをどう設計するのかに関わる問題です。そういう意識から、私は断固、出版物に関して5%以下にすることを望んでいる次第です。

子供が本に触れる場所は学校図書館、公共図書館、絵本館などがあるが、本をそろえるための自治体の図書整備費は非常に厳しい。合併によって大きい町の中央図書館が優遇され、もともと人口の少なかった村の図書館が慄然とするほどさびれるという状況も起こっている。これに対して、荒川区では小中学校28校について、1校あたり80万円の予算があり、図書室が魅力にあふ

れているんですね。ガラス張りで司書が二人いて子供たちにお勧めの本のガイダンスをしたり質問を受けたりしている。こういう、地方と一部の都会の落差の大きさの根源には、やはり財源の問題が絡んでくる。財源がもともと厳しいところにさらに税率が上がると、地方の自治体では、図書整備がさらに困難になる。20年ぐらい前の図鑑が並んでいて、科学の進歩においつけないという問題がある。

朝読が普及して読書欲が高まり、本を求める子供に学校だけでは対応できなくなっているという問題もある。そういうときに家庭の購買力が問題になってくる。1500円の本で10%の税なら150円。子供がどんどん本を買いたいとか、子供が何人もいて何冊も買うとなれば、税だけで1000円、2000円になる。こういうミクロの視点で見れば、税制がいかに子供の将来に大きく関わってくるか見えてくる。そのあたりをとらえないと、マクロな財源論だけで問題を考えると、この国の子供が危うくなってくる。

いま、子供の人格形成を危うくしている原因は、まず核家族。両親が働いているので、子供が親と一緒にスキンシップのある時間をもてなくなっている。そしてほとんどスマホに依存している。ネット社会では、スマホ依存によって活字文化から離れていってしまう。最近、ある大学で、私の世代で当たり前の本を今の大学生が読んでいないと知って驚いた。学生はスマホで必要な情報を見たり、ニュースのトップの簡単な情報だけを見たりしている。学年が進んで専攻科目が狭まってくると、その分野の本は読むけれど、読書によって幅広い見識を身につけるとか世の中を見る目を養うとか、そういうチャンスがほとんどない。

国が生き生きしているというのは、子供が生き生きしていることです。子供が生き生きする環境を大人が作っていくことです。日本が貧しかった頃、どんな山の中でも文教場があり、そこでは子供たちが故郷を愛していた。いま、地方では小中学校の併合が進み、子供は広い地域からバスで集められて、また帰りもバスでばら撒かれていく。友達が連れ添って遊ぶこともなく、子供はただ疲れている。これが地方の過疎地ではどこでも見られる風景になっています。恐ろしいことです。その中で、税を上げることでますます本に対する接触の機会を奪っていくというのは慄然たる思い。この税制の問題が、日本の活力、子供、この国の未来に関わっていることを、政権はしっかりと認識してほしい。

書物の重要性を考えるときに、小学生、さらに幼児期において、浅田さんのように、本を食べて生きるような少年少女時代を持つことがいかに大切か、ということです。